

近代における絵巻復興

—前田青邨筆「御輿振」についての考察—

塩田 釈雄 茨城県天心記念五浦美術館

日本美術院を牽引した前田青邨(1885-1977)。その作例には多数の絵巻作品が知られるが、特に第6回文部省展覧会出品作「御輿振」(1912)は青邨絵巻の嚆矢を成すものとして重要である。本図の制作背景として、岡倉天心と原三溪という支援者の存在が大きい。天心の教授に感化されたと画家が述懐するとおり、確かに「伴大納言絵巻」、「平治物語絵巻」といった古絵巻からの影響は色濃い。しかし、本図制作に多大なインスピレーションを与えた古画として、三溪愛蔵の品を考慮に入れる必要がある。青邨のパトロンであると同時に、古美術の蒐集家であった三溪の邸宅の奥座敷で青邨は本図を描いている。本発表では、三溪旧蔵の「一遍聖絵」第7巻第2段からの大幅な図像引用、さらには構図上での類似点が見られることを明らかにする。支援を受けた画家の実制作と三溪コレクションの関係については、既に今村紫紅「熱国之巻」が「松原之巻」の影響を受けたとされる説が提出されているが、「御輿振」から三溪のパトロネージの新たな一面が窺い知れる。また、青邨が6年後に制作した、同じく平家物語主題の「維盛高野之巻」も「一遍聖絵」の表現を借りており、近代日本画家による「一遍聖絵」受容の一端を示すものでもある。

本図のもう一つの大きな特徴として、物語性の捨象を挙げることができよう。物語性を作品に取り込むことを嫌う青邨の性格は、画家の女婿にあたり、絵巻研究の大家である秋山光和が鋭く指摘しているが、本発表では「御輿振」主題の他作例との比較検討を行い、青邨が物語の筋を殆ど描出していないことを示す。当時の美術史研究では、特に『国華』誌上で瀧精一が頻りに絵巻論を展開し、古絵巻の最も優れた点が人物の活動描写にあるとされた。青邨と同門の小林古径が『国華』誌を購読しているため、青邨も先端の研究に大きな関心を寄せたことは想像に難くない。本図において、青邨の表現の主眼は群衆の描写にあり、人物の姿態や相貌を「伴大納言絵巻」等の古絵巻に範を採ったのは、当時の美術史研究の絵巻観と無縁ではない。

大正期の画壇では、横山大観や青邨ら日本美術院系の画家が中心となり、絵巻復興とも呼ぶべき現象が生じていた。古絵巻が博物館や展覧会といった場で広く公開され、出版印刷業の発達で絵巻の複製本が流布し、個別の作品研究が深化する中で、絵巻は美術史上で高い評価を得た。美術史家が古絵巻の価値を定め、また青邨ら画家が古絵巻を下敷きに新たな絵巻を生産するという関係性が、絵巻の古典化を進展させた。「御輿振」以前から、多くの画家が絵巻の群像表現を屏風などの大画面に取り込む傾向があったが、青邨の試みは、そうした造形美を絵巻形式そのものに再生させ、展覧会場でも鑑賞に堪えうる作品を積極的に描くことであった。

(しおた・しゃくゆう)